

THE
NMUN KOBE TIMES

Kobe City University of Foreign Studies

会議を目前に控え、代表は最終準備に取り掛かる



写真:神戸を訪れる代表らの手助けをすることを楽しみに待つ学生ボランティア

会議の開催を一週間後に臨む11月12日、本学で行われた最後の模擬国連演習授業で、NMUNの代表らは総仕上げに取り掛かった。この授業では前回同様、実際の会議の流れに沿って行われた。会議の最終段階に行われる決議草案の採択まで行われた。

最初の公式ディベートでは、5人の代表らが議題の設定に関するスピーチを行った。例えば国際連合経済社会理事会(ECOSOC)のセルビア共和国は、これまで国連やECOSOCにですら災害のリスク軽減についての会議があまりなされていないとし、議題2について話し合うべきだと述べた。持続可能な開発目標(SDGs)につなぐ持続可能な社会に向けて前進するために、今回の会議はこの議題について行われるべきであるとした。

議題の順番について意見を交換する非公式ディベートのために10分間会議が中断された後、会議は再び公式ディベートに戻り、議題の順番について再び話し合った。国連難民高等弁務官事務所(UNCHR)のウガンダ共和国は議題1について話した。この議題は難民教育と上水供給に関するものである。ウガンダ共和国によると難民の60パーセント以上は18歳未満であり、子どもたちへの持続可能な教育システムの促進の重要性を物語っている。また、名古屋外国語大学4年生の栗本博子さんは、上水供給には井戸の建設と技術提供が必要だと述べた。

(次項へ続く)

UNCHR のセルビア共和国は、母国から追われた子どもの難民について深く憂慮していると述べた。本学英米学科3年生の御厨ありさんは、「セルビア共和国は2種類の支援をしています。難民が他国に移れるようにするための支援と、難民を受け入れるための場所の提供を受ける支援です。遺憾ながら、セルビアには難民キャンプが五つしか無く、6千人までの移民しか受け入れることができません」と話した。

国連総会(GA)のガーナ共和国は、難民問題に取り組むには他の国々と一丸となって働くことが重要だと訴えた。本学英米学科3年生の高東奈央さんは、「ガーナは高い教育水準の実現と児童労働の改善という点において、難民問題を改善させるために他国と協力することも厭わない」とした。そして、会議は議題1を議題2より優先として話し合うことに決まった。

その後、非公式ディベートが45分行われ、その間に代表はワーキング・グループを組んでワーキングペーパーについて話し合った。



次の公式ディベートは国連総会(GA)のオーストラリアによるスピーチで始まった。本学国際関係学科2年生の中村拓巳さんは、前回の非公式ディベートの内容を要約した。その後二つのグループに分かれてディベートが行われた。一つ目のグループは核兵器廃絶のための包括的核実験禁止条約(CTBT)について話し合い、二つ目のグループは核不法取引の管理と、アフリカの安全保障システムについて討論した。この公式ディベートが終わると、代表はワーキングペーパーを具体的にするために、他の代表らとより深く交渉し始めた。この非公式ディベートの間に、六件のワーキングペーパーが承認され、決議案として議長に提出された。

そして会議は再び公式ディベートに戻り、代表らは各々の決議案を説明した。例えば ECOSOC のオーストラリアは、女性や紛争地の住人などの危機的状況下にある人たちに教育を与えることが早急に求められると話した。会議の終盤で決議案はプラカード投票と点呼投票、全会一致によって採択された。会議終了後、本学英米学科の立木ドナ教授と、京都外国語大学の教授で模擬国連(MUN)に参加する学生の監督経験があるクレイグ・スミス教授がアドバイスをした。

立木教授は以下のように薦めた。「スピーチをする時、喋るのが早すぎる人が何人か居ました。短い文ではっきりと言う方が良いです。焦らなくていいです。」

スミス教授は、「今年の元日に持続可能な開発目標のプログラムが始まりました」と話した。「このプログラムは、この世界をより良いものにできるかということに大いに関わっていくことでしょう。今後15年の間に世界の特定の地域でどのようなことが起こるにしろ、これはこの世界をより良いものにしていくための一つの重要な位置を占めることでしょう。そしてNMUNに参加することは、よりよい世界に向けたこの15カ年プログラムに関わる一つのチャンスです。」



本学学生ボランティアのもてなし準備も進む

加茂隆大

この7ヶ月の間、本学の学生ボランティアが280人ほど集まり、世界中から来日する340人ほどの代表らをもてなすために準備をしていた。2015年初頭に行われた執行委員会に集まった13人の生徒によってこの活動は動き出した。執行委員会



持つ。執行のほとんどが外国で行われた過去のNMUNに代表として参加した経験の委員によってボランティアは五つのグループに分けられた。京都と広島への訪問を行うグループ、会議を支援するグループ、インフォメーションサービスグループ、そして式典と社交行事を支援するグループである。どのグループも日本で初めて行われるNMUNを成功に導くために活動している。

京都と広島の訪問を担当する生徒は約100人にのぼる。最大で27人を擁する一つの大学につき3人の生徒が担当する。京都では清水寺や金閣寺、広島では宮島や平和公園などの観光地を案内する予定

だ。彼らは京都担当の5グループと広島担当の5グループの計10グループに分け

られ、10月からこれまでに10回以上集まりそれぞれの都市について勉強会を開いた。それぞれの都市と日本文化についての背景と現状についてうまく説明できる能力が求められる。例えば、広島を担当するグループは代表が聞いてくるかもしれない質問を書いたリストをメンバーに配った。このリストは日本の有名な観光地トップ3などを含む幅広い内容を取り扱っている(このトップ3に宮島の厳島神社も名を連ねる)。京都訪問のグループは、交換留学プログラムによりオーストラリアのモナシュ大学から本学修士課程に留学中のミーガン・スネドンさんと呼び、外国人観光客が聞きそうな質問についてアドバイスして頂いた。例えば、神社と寺の違いや、京都の伏見稲荷大社にある千本鳥居にはどんな意味があるのかなどである。

代表が来日する一週間前にあたる11月12日と13日には、それぞれが担当する都市へ実際に足を運び、ガイドのリハーサルをした。

会議の支援をするグループは約30人の学生ボランティアからなり、会議の進行をサポートする。受付で参加者を神戸国際会議場まで行く手伝いをする生徒や、会議室で奉仕係をする生徒がいる。会議では代表がメモ書きを議長に送ることがある。このメモ書きを代表から受け取って議長まで渡すのも奉仕係の仕事だ。

インフォメーションサービスグループは空港に到着した代表に出迎えたり、彼らが滞在する神戸のホテルに行く手伝いをしたりする。国際会議場では、インフォメーションデスクで参加者に昼食を食べる場所などの情報を提供する。神戸の商業的中心地である三宮の各地に立ち、参加者を目的地まで案内する生徒もいる。

式典を支援するグループは約40人の生徒からなり、式典会場を設営したり、代表を会場まで案内したりする。開会式では会場の証明や音響を担当する。

社交行事を担当する26人の生徒はジャズ・ナイトと代表者のダンスパーティーを担当する。

昨年チェコ共和国のプラハにて行われたNMUNでは、主催校のパラツキー大学の生徒が他国の代表が街を散策できるように支援した。プラハには英語で書かれた標識が一つもなく、会議室は開会式があった場所から離れていた。

「ボランティアの方々がいつも場所移動を注意深く案内してくださったのでとても快適だった」と浦町直弘さんは語る。彼は本学国際関係学科4年生で、今年の式典の統括者である。「代表たちは会議をするために神戸を訪れるので、ここに滞在する間はいかなるストレスも感じてほしくない。また、日本文化を満喫して欲しいと思う」と彼は続けた。



模擬国連の国内開催に尽力:3 人のカナダ人教員

船橋ゆずり、上野稜

英語で開かれる MUN を日本で開催するために、3 人のカナダ人の教授が多なる労力と情熱をかけている。英語教育に向けた熱意をきっかけに育まれた友情は、深大な貢献として実を結んだ。この 3 人の教授とは、本学のローリー・ゼネック西出教授、立木ドナ教授、そして京都外国語大学 (KUFU) のクレイグ・スミス教授のことである。全てはサスカチュワン州ポーキュパン・プレーン出身の西出教授が、京都外大西高等学校の授業の一環として 1990 年に MUN に参加したことから始まった。当時、日本にも MUN のイベントを行った国際的な高校がいくらかあったものの、その参加者は全員英語のネイティブ話者か、それに近いものであった。西出教授は、日本の高校生に MUN を英語学習の場として参加してほしいと考えた。他の教授とチームとして働く中で、西出教授は英語を母国語としない高校生向けの MUN としては初めてとされる会議を設立した。この会議は関西高校模擬国連と呼ばれ、現在も毎年の行事として続いている。

西出教授は、参加していた日本国内のある大学院プログラムでスミス教授と知り合った。スミス教授はオンタリオ州ロンドン出身である。スミス教授は 1995 年に KUFU の教授となった。その時 KUFU にて開催された関西高校模擬国連について知り、MUN が大学生にとって有益であることに気がついた。また 2001 年の 9.11 テロの際は、学生は世界各地の紛争は貧困問題によって引き起こされているということを知るべきだと感じた。同時に、日本の学生はそのようなことを考える機会が十分ではないと考えた。スミス教授は同年から学生を海外の MUN へ連れていっており、また西出教授と精力的に日本での MUN 関連の活動にも取り組んでいる。西出教授とスミス教授は 2010 年、京都外大西高等学校にて教鞭をとっていたもう一人のカナダ人と共に日本大学模擬国連大会 (JUEMUN) を開始した。この時期に本学の国際コミュニケーションコース (ICC) が始まった。当時、日本の大学で毎年行われる英語の MUN 会議は存在しなかった。MUN のクラブ活動をしていた大学はあったものの、公式に MUN をカリキュ



(左から西出教授、立木教授、スミス教授)

ラムに組み込んだのは本学が初めてである。アルバータ州エドモントン出身の立木教授が MUN に参加し始めたのはこの時である。立木教授は 2010 年に名古屋にて開催された全国語学教育学会 (JALT) 国際会議の共同司会者を務め、JALT に JUEMUN の初めてのスポンサーになるように持ちかけた。

三人はこのイベントを通して、外大連合と大学コンソーシアムひょうご神戸の生徒がたくさんの目標を達成し、素晴らしい技術を得ることを期待している。NMUN を経験することで生徒は、自分は何ができるかという全く新しい期待をもって日々の生活や授業に臨むことができるようになる。立木教授は考えている。また、世界中から集った代表らと友情を育むことができることも代表の経験の一つだとしている。

スミス教授は「面と向かったコミュニケーション」の重要性を強調する。記事をただ読んだりインターネットでただ調べ物をしたりする場合とは異なり、外国の生徒と面と向かって同じ問題について議論することで、より緊密で有意義な経験をすることができる。西出教授は、日本で開催される NMUN を生徒や教員、そして日本の大学コミュニティにとってグローバルな市民権を拡大するための機会だと考えている。

1 巻 5 号を担当した記者

加茂 隆大 船橋 ゆずり 高野 七海 大石 紗英 阿部 弘果 塩谷 広子
森田 帆風 東前 彩美 上野 稜 山崎 智美 白石 汐音

1 巻 5 号翻訳者 時末 光 (ICC 翻訳クラス)